

イザベラ・バードの京都滞在

——「新島襄邸」訪問を中心に——

大野純子

はじめに

イザベラ・バードは1878（明治11）年秋に東北・北海道の旅を終え、しばらくして関西に向かった。彼女は10月11日¹⁾に横浜から船で神戸に到着し、アメリカン・ボード（以下、ボード）の宣教師O.H. ギューリックの温かい出迎えを受け、神戸の彼の自宅に落ち着いた。

バードは京都には一人で約2週間滞在した。京都での宿泊場所は当日まで決まっていなかった。バードは「一人で〈宿屋^{キドヤ}〉で数日過ごす覚悟をしていたのだが、着いてみるとここで世話になる手筈がすでに整っていた（完4-77）」と記している。「ここ」とは、開校間もない同志社女学校（以下、女学校）のことである。

バードは旅行家として、人の紹介を得て未知の人の家に泊まることに慣れていて、そこでうまく過ごすコツも心得ていた。しかし、バードの京都滞在の記述は何か所か不自然さが感じられる。本稿は特に彼女の新島襄邸訪問に焦点を当てて論じる。バード著『日本奥地紀行』の引用にあたっては、金坂清則訳の完訳版 vol.1～4 を用い、引用部分の巻数、ページは「完3-21」のように記した。原著は1880年ジョン・マレー社版の電子版を用いた。

1. 新島襄邸訪問

1.1 バードを自邸ではなく、女学校に泊めた理由

日本にまだ洋式ホテルなどほとんどない時代、外国人宣教師とその紹介がある西洋人旅行者は、その地の宣教師館に招かれて宿泊するのが常識だった。新島邸の二階にも三つの板敷きの部屋と洋室の居間があった。ボード本部の渉外幹事 N.G. クラークの推薦状を持つバードは本来なら充分そこに泊めてもらえる資格がある。

この女学校にはボードから派遣された女性宣教師で校長を務める A.J. スタークウェザーと、宣教師の D.W. ラーネッド夫妻が住んでいた。夫は同社英学校（以下、英学校）で教師を務め、夫妻の家を新築する間、体調を崩している妻とともにここに仮住まいをしていたのである。

ここに宿泊するメリットは英語の通じる相手が三人いることだろう。

1.2 日時と家の描写、新島本人の印象

バードが女学校の建物に泊まって約1週間後、彼女は滞在の手配をしてくれた新島にやっと会うことができた。この10月29日火曜日²⁾の午後遅い時間の訪問は、毎日多忙を極める新島からの指定だろう。この日はバードにとってベストの日ではなかったはずだ。彼女はこの日、忙しかった。午前中に一人で人力車に乗り、西本願寺の英語の堪能な僧侶赤松連城を訪れ、仏教や日本人についての話を聞き、昼頃、女学校に戻っている。会見内容のメモをすぐにも整理しておきたかっただろうが、彼女は再度外出して新島邸に出向いた。

訪問は、“tea”と呼ばれる午後の時間帯で、マナーとして短時間の滞在しか許されない。バードは「軽食はテーブルに用意されており（完4-85）」と書いているので、温かい料理は何も出なかったことになる。飲み物は紅茶とコーヒーで、食べ物はアメリカ式のワッフル³⁾にバターやジャムを添える程度で、後は果物か菓子程度のごく軽い扱いである。

そんな簡素なもてなしだったが、バードはテーブルの上にすばらしい磁器があり、また、古薩摩（old Satsuma）の陶磁器もあったと記している。こ

れには驚かざるを得ない。新島襄夫人八重は会津藩士の家に生まれ、会津戦争では女性ながら実戦で明治政府軍（実質は薩摩軍）と戦った人である。しかもバードはこの古薩摩について「英国だったら戸棚にしまい込んでおく宝物のような立派なものだった（完4－85）」と書いている。ヨーロッパではジャポニズムの影響で薩摩焼の陶磁器がもてはやされていた。しかし、目の前の焼き物が現行（当時）の薩摩焼なのか、それとも古薩摩なのか、最近の京薩摩なのか、また古薩摩ならどのぐらいの値打ちがある物なのか、バードにはそんな鑑識眼はない。すると少なくとも、これが古薩摩で立派な物であると教えたのは、新島本人か八重だろう。

バードは白人以外の顔立ちに基本的に嫌悪感を抱いている。この日の午前中に会った赤松連城についても従来の例にもれず、背が小さくて「顔もよくなかった（完4－92）」と書き放っている。彼女は関西に来る前に東京で外務大輔森有礼に会っている。彼が芝離宮で外交関係者のために催した歓迎会に招かれたのだが、最高級といってもよいもてなしに対してあら探しを繰り返して、「私は午後の一日をこのように無駄に過ごしたことを後悔した（完4－53）」とまで述べている。それでも森自身については「かなりうまい英語を話」し、洋服も大部分の日本人とは違って「着こなしも板についている」（以上2箇所 完4－53）と記し、それまで日本人に対して書いてきたような顔の造作に関する評価もない。

しかし、新島に対しての気遣いはそれを上回っている。まず、彼の顔立ちや身長にはふれていない。新島の顔には幼少時からの目出つ傷あとがあったが、当然それにも言及していない。バードは新島が洋装であること、森と同じようにその着こなしが板についていたこと、英語については「今も英語をかなり自由に生き生きと話すことができる（完4－87）」と述べている。そして、強調しているのは外見よりも全体的な雰囲気。「氏は何よりも紳士的であり、その物腰には落ち着きと寛ぎと礼儀正しさがある（完4－87）」と綴っている。

1.3 新島にとってのバード

新島はバードがこの会見、また、英学校、女学校で見聞したことを本に書

くことは当然承知していた。彼は10年のアメリカ生活から帰国してたいして時も経ていないのに、立派な家を新築したと書き立ててほしくはなかっただろうが、できるだけ西洋流、それも彼にとって価値のあるボストンの上流社会の家庭風に暮らしていることを隠す気はなかった。そうでなければ、ありふれた冷たい軽食に価値ある古薩摩や「まことに美しくみごとな磁器（完4-85）」をわざわざ用いる必要はないはずだ。バードは「氏の書齋は英国の学者のものとそっくり（完4-86）」だと書いている。当時の日本では洋風の生活は非常に高がつき、富がなければとてもできないことだった。一方、バードは彼がこのような生活をするのがなぜ可能なのか⁴⁾、神戸のギューリックから充分聞いていたと思われる。

新島はバードが日本で誰と会ったか、または会うのかはもとより、本が出版されたあと、誰が読むのかについても熟慮する必要があった。ボードの本部、新島に個人的援助を惜しまないアメリカの慈善家たち、そして在日の西洋人も当然読むだろう。また、英語が堪能であり、新島の合法的帰国に尽力してくれた森有礼をはじめ、野口富蔵が読む可能性もある。

野口富蔵とは、京都府知事榎村正直がバードのために派遣してくれた勸業課の職員である。これは英国領事官E.M.サトウ⁵⁾の要請かと思われる。バードは野口の案内で骨董店や勸業場、女紅場、青銅器や京薩摩の陶器製造所などを見た。この野口が見聞きしたことは直ちに耶蘇嫌いで知られる榎村に伝わる可能性がある。野口は元会津藩士であり、かつては藩命により数年間、函館で英学を学んでいた。新島来函の1864（元治元）年も函館にいた可能性が高い。野口はその翌年の秋、サトウの通訳兼護衛となり、掛川宿事件で彼の命を救って感謝され、英国留学の機会を与えられた。東京に戻ったバードが後日、京都で見聞きしたことをサトウに話し、それが再度野口に伝えられる可能性もあった。

新島は西洋人には、彼と同志社関係者の奮闘、学校の進歩を見せたいし、日本人に向けては青少年の教養教育を通じて国民のレベルアップに励んでいるところを見せたい。しかし、まず第一に考えるべきは、本を読んだ人から問題を指摘されないようにするということである。そのような矛盾した思いが新島の口を重くさせるのである。

2. バードが一番聞きたかった「冒険」の話

2.1 当時、誰がどのぐらい知っていたか

バードが特に聞きたかったのが「冒険」の話である。彼女は「私が他の人から聞いてきた氏の冒険には不思議に感じられることがたくさんあった（完4-87）」と記している。この「冒険」とは新島が函館から脱国したことを指すと思われる。バードとしてはつい先月まで函館に長く滞在し、土地勘もあるから、二人でおおいに函館の話に興じたいと考えていたのだろう。

このバード来訪の時点で、新島の脱国の様子を詳しく知る者は日本国内には一人もいなかった。すると、バードは誰から「新島氏の冒険」のことを聞いたのだろうか。新島は1864（元治元）年陰暦4月21日に函館に着き、在函期間も二か月弱と短く、また当初から脱国しようという意志があったので目立たずに過ごし、そしてこっそり消えた。その時に関わった福土成豊、沢辺琢磨は当然秘密を守り通した。

10年後に帰国した新島は京都に落ち着くことになり、ボードの同僚であるギュリックをはじめとする関西在住の宣教師らと親しく接することになった。当時、脱国時の事情について一番くわしく知る可能性があったのは彼らである。彼らは好奇心を持っただろうし、言葉の障害もない。新島もまったく語らないわけにはいかなかっただろう。

2.2 新島が綴った脱国の手記

現在、新島の脱国とその前後の事情、彼自身の生い立ちについては、本人が書いた2種類の手記が知られている。最初のもの（現在は「脱国の理由」として知られる。以下、Aと記述する）は、1865（慶応元）年、新島のアメリカ入国直後、船主であるA.ハーディーの求めに応じて書かれた。二番目のものは1885（明治18）年、二回目の渡米時に書かれたもので、後に「青春時代」というタイトルがつけられた。（以下、Bと記述する。）両者に共通するのは新島が英文でこれを綴り、ハーディー個人に向けて書いた手記であることだ。ハーディーの息子による一般への公開は新島没後であり、日本語に訳されたのはそのかなり後であった。

バードが知りたかった「冒険」に関しては「函館紀行」と呼ばれる新島の旅日誌（『新島襄全集』vol.3）にくわしい。しかし、彼女は当然、その存在も内容も知らなかった。

2.3 「冒険」を語る際、注意すべきだったこと

現在の新島にとって、過去に国禁を犯したことは当然、自慢気に話すべき性質のものではない。それだけではなく、新島には1878（明治11）年当時、このバードとの会見で特に明確にしたい事情が二点あった。

まず第一には脱国の理由である。ハーディーやボードの宣教師たちは主な理由は「キリスト教を学ぶため」であったと理解していた。先にあげた手記A、Bはどちらもそのことが主張されている。そうでなければ新島はアメリカでスポンサーを得ることができなかった。しかし、新島は帰国後、国内向けの脱国の理由として「日本の将来のために西洋で学問を学びたかった」ことを強調した。脱国前の新島がキリスト教についてどれほどの知識を持っていたかという点はさておき、これらはどちらも真実であり、彼は相手によってこの理由を使い分けた。彼がアメリカに対する強い憧れを抱いていたことは、この二点の理由とまったく矛盾しない。キリスト教への希求も、キリスト教文化も西洋の科学技術もすべてアメリカという国家の中に収まっていた。国の長が国民の選挙で選ばれる国、自由に政治的意見を言える国は、封建社会に嫌気がさしていた新島にとって理想郷に思えたはずだ。

第二には脱国に至るまでの資金の出所と使い道である。安中藩江戸藩邸詰藩士であった新島は離藩ではなく、正式に藩主の許可を得て、武田斐三郎の塾で「航海兵学」を学ぶために来函した。彼は安中藩からそのための学資金を貸与され、友人の餞別なども含めて25両という大金を持って旅に出た。これは当時の新島家の年収を超える金額である。それが船で江戸を発ち、函館に着いた3か月後にはわずか1両2分に減っていた。その理由を新島は「海路に長く日を費やし、時二港の怪物に奪取られ（『新島襄全集』vol.5 p.70）」と書いている。それは函館に向かう船が立ち寄ったくわがさき鵜ヶ崎港（岩手県）で、不測の事態が起きたことを暗示している⁶⁾。藩から兵学を学ぶために貸与された大金の大部分はこのようにして消えた。このようにして新島は所持金が

ほとんどない身の上となり、もはや函館から江戸に戻る旅費さえなかったのである。

しかし、この第二の点については新島はそれほど気にすることはない。バードは初対面の新島に金銭的なことはたずねにくいし、藩の学資金貸与など知るよしもない。また、当時、西欧の流儀を身につけた男性なら、女性に遊郭の話題を持ち出すことはあり得ない。

3. ニコライと新島

3.1 函館での関わり

バード来訪の時点で新島は帰国後4年めであった。多忙の中で脱国のことを思い出す時、最大に悔やまれるのは、当時はあれしか選択肢がなかったとはいえ、ロシア領事館付司祭ニコライに世話になったことであろう。

前述のように所持金をほとんど失った新島は、函館在住の外国人の家に居候をしたいと考え、津田塾の菅沼精一郎の斡旋で望みが叶った。紹介されたロシア領事館付司祭のニコライはその時、来日3年弱で、将来日本でキリスト教が解禁になる時に備えて、木村謙齋の私塾に毎日通い、日本語、日本史、儒教、仏教について学んでいた。木村の子息によれば、母親からの伝聞としてニコライは議論好きで、よく父親の謙齋と議論を交わし、日本の書生とはまるで違う熱心な勉強ぶりであったという。母からは日常生活の言葉を学ぼうとしていた。ところがその木村が最近離函してしまい、ニコライは師を失ったところだった。そのため、彼は喜んで新島を迎え、古事記の教授を希望した。

「函館紀行」によれば、ニコライはまず新島に個室を与えた。彼はベッドや机での生活、洋式の食事にも初めから抵抗はなかったようだ。また、ニコライは代数学など手持ちの本を貸し与え、眼病を患う新島にロシア病院の治療を受けさせた。新島が英語を学びたがったので、ニコライは自分より英語が上手なロシア武官を紹介した。また、脱国の願いを聞いてからは、その前に写真を撮って両親に送るべきだと主張し、無料の撮影を取り計らった。こ

これは、新島が1864（元治元）陰暦5月5日にニコライ方に入り、6月14日深夜に脱国するまでのわずかな間に示された厚遇である。また、ニコライは7歳年下のこの青年に、性病の恐ろしさを説いている。当時、ロシア病院の医師をしていたアルブレヒト、ゼレンスキーから日本人の眼病と梅毒患者の多さをかねて聞いていたためだろう。ニコライは約50年にわたって日記を付けていて、そのうち40年分が日本語に翻訳されているが、残念ながらこの時期のものは存在しない。東京移住後、関東大震災の時に焼失したものと見られている。

3.2 贋作の疑いがある手紙

新島には存命中から多くの崇拜者がいた。彼らは「『新島先生らしからぬ』資料や記事は公開をはばかるという歯止め（本井2002）」をかけたつもりもした。そして古くはそれ以上の資料の改竄、贋作、伝聞の創作もあった。ここではニコライにあてたという新島の手紙⁷⁾を紹介する。この手紙を崇拜者の筆になるものとして読むと、彼らが何を隠したかったのか、読者にどう思わせたいか浮かびあがる。

この手紙の日付けは新島がニコライ方に滞在中の1864（元治元）年の5月とのみあり、原本に日にちの記載はない。新島が書いた手紙なら自身が控えを取り、それをまた他人が書写し、甥の新島公義が保管していたものか。内容に関しても疑義の生じる点がいくつもある。たとえば「ロシア病院で眼病の治療を受けられるように頼んでほしい」という一文がある。新島がニコライ方に移り住んだのが前述のように同年5月5日で、「函館紀行」によれば、翌6日に彼はニコライにそのことを直接話し、翌日には治療が開始されている。（同志社2014 p.98）。すると、この手紙は一体いつ書かれたのだろうか。

また、本文中に「図らずも貴殿の世話になり、実に自分の元々の願いに叶って喜んでいる」「外国に行くためにどうすればよいか伺いたい」とあるが、その他にニコライへの礼、感謝の言葉はなく、なぜ欧米に行きたいのかという自分の希望と覚悟が縷々と綴られている。これを読んだ人は、新島が脱国前にすでにキリスト教を学ぶという目標を明確に持っていたこと、外国に行きたいという希望を結局ニコライは叶えてくれなかったという印象を持つだろう。

3.3 ニコライは本当に新島にキリスト教を教えなかったのか

ニコライは新島に会う8か月前、1863（文久3）年8月にロシアの宗務庁長官に宛てて手紙を出している。そこには「日本語がかなりできるようになったこと」「ロシアの公費で建てられた学校でロシア語を6人の日本人に教えていること」「函館の仏僧と懇意になり、時々説教を聞きに出かけ、宗教についての知識や情報を得ていること（ニコライ[1879]1993 p.144～6）」が書かれている。

新島の没後、八重は長命を保ち、亡夫に関する思い出を語る機会を多く与えられたが、彼女もまた、夫の思いをよくくんでいた。1921（大正10）年、八重は安中教会の歓迎会の席で「あのとき、ニコライ師が新島に聖書を教えてくださっていたら新島は米国には行かずにロシアに行っていたでしょう。そうすれば同志社も興らなかったでしょう（楠木2012 p.260）」と述べた。これは八重一人の考えではない。鏑田研一は『新島襄 [わが人生]』の注に「この時ニコライが、自分の奉じている宗教、ロシアの国教であるギリシャ教を吹き込みでもしたらどうであったろうか？」と記し、「吉田清太郎氏がニコライに会った時、『なぜ新島先生にキリスト教を説きませんでした？』と訊くと、『あの時はまだ日本語がよくできなかったから……』と答えたそうである（p.56～57）」と綴っている。

ニコライが恐らく初対面で、親しくもない人間に単に「あの時は日本語ができなかったから」と答えるとは思えない。ニコライは木村謙齋の息子の一人をほしがったこともある。有為の青年をまず自分が教え、将来はロシアにやって学問をさせたかったのだ。

彼は実は日本宣教を目的に来日した。禁教下ではあってもこの聡明な青年にキリスト教を説かないことがあるだろうか。新島がロシアに行きたくない理由は、彼がキリスト教の教理の違いを理解していたからではなく、日本人として抱くロシアに対する漠然とした不快感と、帝政に対する反感からであろう。

しかし、ニコライがあっさり新島を諦めたのは確かである。いよいよ脱国という時、なぜかニコライはロシア領事館にいなかった。懇意の僧のところはかなり早めの避暑に行っていたようだ。領事官付司祭という国家公務員

であるニコライが新島の脱国を助けたと疑われ、国外退去を求められるような事態を避けるためであろう。

3.4 帰国後の新島とニコライ

新島が帰国して8年目、ニコライは京都で日本人司祭二人を連れ、珍しく観光をした。そしてその際、英学校と新島邸を急に訪れた。三人はまず、英学校の校内に入った。「残念ながら新島には会えなかった（ニコライ vol.2 p.165）」とニコライは書いている。その代わりに、「どの建物からもたくさんの若者が覗いていた（同ページ）」とある。そのあと、「新島の家を訪ねたが、ここでも会えなかった」と綴り、この話題は終わっている。

この時、ニコライはなぜ新島に会おうとしたのか。懐かしさと、英学校の様子を知りたかったためであろう。新島は決して恩知らずな人間ではない。脱国時に世話になった船長二人とは、長く手紙を交わし、再会もしている。脱国時、最も助けとなった福土成豊については、英学校設立直前の多忙の中、わざわざ函館税関に彼の住所を問い合わせている。しかし、帰国後8年経ってもニコライには会うどころか、礼状の一本も書かなかったようだ。ニコライの日記にもその後新島から連絡があったとは書かれていない。函館で別れの宴を催してくれた沢辺琢磨に対しても同様である。新島が帰国した頃、沢辺はすでにかつての神社の宮司ではなく、正教の司祭として東北地方を中心に活躍していたからである。

英学校のことだけでも手一杯のはずの新島は、バードの訪問半年ほど前に群馬県安中に教会を設立している。これは正教の教勢が南下することを恐れ、橋頭堡としたかったからだ。後に新島は仙台に拠点を作るために奔走したが、その時は「ギリシア教会〔ロシア正教会〕を押しつぶすため」という理由をはっきりあげている。（太田 2005 p.300）

4. バード訪問前後の新島の身辺

4.1 続くジレンマ

新島は脱国してアメリカに着いた時から、多くのことに対して常に二通りの方策を考えなければならない立場になった。彼は1874(明治7)年10月、アメリカから日本に帰国する直前にボードの大会で新任の準宣教師としてスピーチをした。新島は会衆派の信者である聴衆に、日本におけるキリスト教教育の学校建設の必要を強く訴え、聴衆から自然発生的に5,000ドルという大金が寄せられた。

彼が作りたく願う学校は宣教師の養成学校なのか、それともキリスト教主義に基づき、西洋の学問を教える学校なのか。また、過去の外国の事例を見れば、学校の目的がどうであれ、生徒の大半が西洋の学問の修得を目標にしがちであることは明らかだった。また、当時の日本の事情を考えると高札撤廃後とは言え、国内、特に京都の地でどこまでキリスト教主義教育を謳えるかも問題であった。それ以来、ボードの唯一の日本人宣教師新島は学校運営に関して、常にアメリカン・ボード向け、日本国内向けの2種類の説明とアピールを行う必要が生じた。国内向けのアピールは将来の寄付金集めの面でも重要であった。

4.2 新島と山本覚馬、京都府知事榎村正直

新島はボードが活躍の中心としている関西で活動することになり、学校用地を探していたところ、京都府知事榎村正直の紹介で旧会津藩士、山本覚馬と知り合った。

山本は幕末時、藩主松平容保が京都守護職を任じられた際、京都に来た。1868(明治元)年1月、鳥羽・伏見の戦いで薩摩軍に捕えられ、仲間と共に薩摩藩邸に幽閉された。この頃、眼病あるいは戦傷の後遺症で完全に失明したようだ。この幽閉生活は意外な厚遇で、薩摩軍から毎晩酒の差し入れさえあった。彼は書籍を藩士に音読させ、自らは一万字に達する建白書「管見」を口述筆記させ、薩摩藩主に提出した。西洋の学問、技術を踏まえ、現在の日本がとるべき政策を多分野にわたって書き記したこの「管見」は、榎村に

とって京都の進むべき道を照らし出す有り難い灯台であった。

かつての都は当時、産業の衰退、人口の流出が見られ、京都人のプライドは傷ついていた。槇村の急務は京都の活気を呼び戻すことであった。1869(明治2)年に幽閉から解放された山本は翌年、京都府に顧問として迎えられた。槇村は山本の進言をもとに京都博覧会の開催、女紅場設立、全国に先がけた小学校設置等の画期的な試みを実行に移し、成功を収めた。

新島は1875(明治8)年6月に薩摩藩邸跡の土地を山本から格安の値で購入した。新島が初めて土地の下見に行った時、屋敷はすでになく、一面の桑畑だったという(和田2015 p.169)。幽閉されていた人物が数年後、なぜその土地の持ち主になっていたのか。その事情は解明されていない。バードが新島邸で見た「宝物のような立派な(完4-85)」古薩摩は、もとはこの薩摩藩邸の所有物で、山本が取りもった実妹八重と新島との結婚に際して送った可能性もある。

4.3 同志社英学校の状況

1875(明治8)年11月、薩摩藩邸跡に英学校が開校した。ボード日本ミッションの宣教師たちは当初、この学校をトレーニングセンター(伝道者養成所)と呼んだ。当初の教師陣は新島の他にボードの宣教師、J.D. デイヴィス、前出ラーネッドで、国内向けの英学校の責任者は新島、ボードの「トレーニングセンター」の責任者はデイヴィスであった。「二人のヘッド」の問題はその後もつきまとったが、新島が献身的に学校運営に尽くし、京都府とのトラブルに全力で当たっているのを見てデイヴィス、ラーネッドも少しずつ考えを変え、お互いの信頼、協力関係が生まれていた。

4.4 新島家の経済事情と家計管理

新島は存命中、日本にいた宣教師の中でもっとも贅沢な生活をしている人たちの一人であった。最大の例は1884(明治17)年4月から1年8か月もの間、欧米に滞在したことである。この期間、寄付金集め、宣教事業のための話し合いなどもしたが、観光もたびたびしたし、アメリカでは高級療養所に滞在もしている。これは宣教師が約10年に一度とる賜暇休暇でも

あったが、異例の長さと桁が違う滞在費用である。この途方もない費用や、たびたびの東京行きの費用はすべてハーディーから出ていたと見られている。ボードの準宣教師としての新島の給与は1877（明治10）年ごろで年額800円と言われている。しかし、これ以外に多くの収入があったようだ。

八重が新島のためにした最大の貢献は、夫の個人的収入の管理ではなかろうか。「新島はアメリカからの金で贅沢をしている」という批判は彼の生前から常にあった。この家計管理ばかりは他人に任せられないし、他人だといつ裏切られるかわからない。

八重は新島没後も生前からの批判を抑えるため、さまざまな反論を試みている。たとえば、「（大野注：横浜に行く時の）船はいつも二等ではなくて三等であった（和田2015 p.229）」と述べたこともある。

伊藤彌彦は、新島がさまざまな人とやりとりした多くの書簡が残されている中で、夫婦間の書簡が極端に少ないことを指摘している（伊藤2002 p.5）。新島は旅行で自宅を空けることが多く、事務的なことも含め、八重とは多くの書簡を交わしていたはずだ。断定はできないが、新島没後に八重が書簡を選択して始末した可能性が高いのではないだろうか。

4.5 同志社女学校問題の芽

この問題は新島の第一の悩みではなかったが、関係者にとっては深刻な問題になった。開校直後の女学校は後に、英学校より問題が多いと関係者を嘆かせることになる。女学校は完全にウーマンズ・ボードの資金で設立されたが、居留地外という事情のため、英学校同様に新島が名目的に校長を務めていた。しかし、このことで問題が生じたのではない。ボードの任命による「校長」スタークウェザーは1876（明治9）年4月に来日し、7年目の1883年5月に心身共に疲弊した状態で日本を去り、帰国後は宣教師を辞めてしまった。

女学校が寄宿制をとっているのは、女生徒に生活を通じてキリスト教精神を教えるためである。スタークウェザーは常にこの点と、ウーマンズボードに寄付をしてくれた同胞女性の期待に応えることを念じていた。当時、ボードは女子の学校には三人の独身女性宣教師を置くことを基本にしていたので

人選の上、後から H.F. パーミリーら二人を京都に派遣しようとしたが、府知事榎村の妨害により、彼女たちは長期間京都での居住を許可されなかった。

そのため、スタークウェザー一人では手が回らず、山本覚馬・八重兄妹の実母である山本佐久が舎監と賄いを担当した。八重は和裁、礼法、習字を教えた。当時、キリスト教主義に基づく女学校では、校長である外国人宣教師の判断で日本女性の伝統的たしなみの教授にことさら力を入れていたので、どこの学校にも日本人の担当教師がいた。しかし、彼女らが勤務先である女学校を手中に収めようとした例は他にない。

八重は自分の意志を強く持った女性ではあるが、彼女の二回の結婚はともに兄の勧めによったもので、明治女性の枠にきちんと収まっている。新島はクリスチャンの女性と結婚すると決めていたので、八重は結婚式の一日前にデイヴィスから受洗し、結婚後も一生懸命キリスト教を学んだ。その上で、八重は京都に来てから少なくとも新島が没するまでは兄山本覚馬、夫新島襄の七光りで活動の場を広げてきた。京都府の女紅場が兄の提案で設立されたため、京都の有能な女性たちを差しおいてその教師になり、機織り、礼法を教えた。新島との結婚後は宣教師夫人としての活躍を周囲から期待されただろう。しかし、彼女の場合、キリスト教の信仰は八重という固い殻の外側に施されたコーティングに過ぎなかった。

八重は受洗後二年弱で、大阪在住の女性宣教師ゲールディと共に岸和田に数回出向き、集まった数百人の女性に説教をした。ゲールディの補助役は本来京都、神戸の女性宣教師の仕事であり、受洗間もない宣教師夫人の仕事ではない。本人が望まなければ、誰も八重にこの仕事をさせようとしなかったはずだが、誰も何も言わなかった。

八重の認識では女学校は夫の学校であった。スタークウェザーは 1880(明治 13) 年前半に初めて八重母子のことをボードの本部に訴え始めた。約 2 年後の手紙には、二人について「『この家の屋根の下』では、あらゆる出来事は全て、外国人の女性教師は知らせないと、決めている」、生徒がスタークウェザーの所に話に来ると母子に目を付けられ、冷たく扱われると述べている(坂本清音他(8) p.206)。やっと京都に来られた女性宣教師パーミリーも同様のことを本部に訴えた。

スタークウェザーはすでに4年間ただ辛抱してきたとも書いているので、ボードが訪問した時にこの不和は目立たないながらも始まっていたばかりか、女学校の前身の女子塾時代からすでにあったと思われる。彼女は続けて、母子は「宣教師は聖書と英語や音楽を適度に教えていればいいと思っており、彼女らこそが教師であって、必要なものを判断するのは自分たちと位置づけています（同 p.212）」とも書いている。

本部は調査の結果、佐久の方は年齢を理由に解雇した。しかし、八重については簡単ではない。八重が新島の妻でなければこうなるずっと以前に解雇されていただろう。クラークはこの件を委ねる理事会を日本に設置しようとするが、メンバーは今まで見て見ぬふりをしてきたデイヴィスとラーネッド、そして八重の夫が中心となるのである。クラークはスタークウェザーに「新島夫人には学校に関わらせるよりも、できれば何か別の仕事を見つけてあげなさい」、「そうすれば学校本来の運営はあなたに委ねるのではないか」（坂本清音他（6）p.209）と見当違いの提案をしている。彼がもっとも避けたいことは、この件で夫新島の怒りをかうことである。彼は「この夫人の影響力が、あなたの周りのクリスチャン仲間だけでなく、彼女の夫に及ぶのではないかと心配せずにはいられません（坂本清音他（6）p.209）」とこれもまたスタークウェザーに言っても意味のないことを書いている。結局この問題はスタークウェザーが、病氣帰国をするラーネッド夫人の頼みで付き添って帰国するという形で一旦落ち着いた。ラーネッド夫人は女学校に住んで一部始終を見てきたのであるから、自らの病氣もあるが、スタークウェザーの心身の状態を考えて、あえて帰国の付添いを依頼したのかもしれない。

当時のアメリカの女子教育では「科学的な知見があり、人を楽しませることができ、身体が健康で活動的であり、人のために働ける（小檜山 2013 p.79）」女性を育成することを目標としていた。スタークウェザーの書簡から見て彼女もまさしくこの理想を持っていたと思われるが、現状は、儒教的婦徳を生徒に押しつける日本人を前にして、彼女はなす術もない状態だった。彼女がウーマンズ・ボードの貴重な寄付金でこの女学校を引き続き運営する意義があるのかと考えたのは当然である。

おわりに

バードは読者のジャポニスム熱を満足させるために、古都京都についておおいに見聞を書きたかっただろう。それなのに彼女は山本佐久が連れ歩いてくれた寺社などの観光地について、何も述べていない。簡単な英文パンフレットを渡された（完4 - 282 金坂訳注6）ようだが、言葉の通じない佐久とともに人力車であちこち回っても、自分がどこにいるのかさえわからなくなりがちだろう。

赤松連城との話し合いは、バードなりに満足するものであり、野口の案内も嬉しかったことだろう。一方、京都での宣教報告はやはりあちこちに気を遣わねばならず、バードとしては気疲れしたと思われる。英学校の授業を見ても、書いてよいこととまずいことがある。このあたりのレクチャーや資金関係のことは京都滞在の前後に長逗留した神戸のギュリックの家で、細かく聞いただろう。ギュリックは、外国に設立した教会は金銭面で叶う限り早く自給すべきだと考えていた。一方、新島は寄付援助を受け続けることになんの躊躇もなかった。英学校は府知事から敷地内で聖書を教えることを禁じられていた。それを神学校と呼ぶのは無理で、「新島氏の学校」と呼ぶのが正しいというのがギュリックの考えである。本部のクラークはその間に入って、双方に賛成する部分があった。

バードは英語で直接話せるスタークウェザーに学校運営の話、将来の構想、女生徒の様子などの話を聞いて記してもよさそうだが、何も述べていない。スタークウェザーは「少女たちが日本の礼儀作法とよいしつけをきちんと身につけることにこの上なく気を配っている（完4 - 79）」と簡単に記しているだけである。これは女性宣教師にとって第一義ではないはずだ。ここに登場する「クリスチャンのある日本人女性」は八重のことであろう。この女性は、外国人宣教師に教えを受けた少女たちの作法がなっていないと、バードにいくつも例をあげている。

バード自身は日本滞在中は日本式の礼儀をできるだけとり入れたいと考えていた。過去の渡米時を含めてバードは英国人女性として、アメリカ人のふるまいに無作法さを感じることも多々あっただろう。たとえそうだとしても、

キリスト教主義女学校の真の目的や日本の現状を校長と語らないというのは、女性作家として片手落ちであろう。

バードは新島から脱国の冒険の話を書きたかったのに、やんわり拒否された。彼女は「氏は謙虚な性格のために経験してきたうちのもっとも興味深いできごとについては話を差し控えた（完4－87）」と氣遣って書いている。新島が熱心に語ったのは、英学校の運営方針、関西の宣教をどう推し進めてきたかなどの本質的な話ではなく、英国旅行時に目についた、過度な飲酒をする英国人の例、日本人の道徳の欠如、日本の若者に英国哲学が広まっていることなどである。

バードは本の中でかなり露骨な仕返しをしている。新島が乗せてもらった最初の船の船長が「宗教について何も知らないことがわかって失望した（完4－86）」と記したのである。『日本奥地紀行』の出版後、船長本人から指摘を受けた新島は、彼に謝罪の手紙を書いている（完4－292 訳註70）。これはバードの作り話であろう。なぜなら無理もないことだが、新島の英語力はその時それほど高くなかったからだ。後にボストンに着いた時でさえ、船主であるハーディーに口頭で渡米の理由と将来の希望を述べたが通じなかったで、ハーディーは文章にして自分に渡すように言ったくらいである。（これが、2.2で述べた「脱国の理由」である。）ましてこれは函館から乗船したばかりの時期のことでもあり、新島はこのような抽象的な話題について自由に会話ができる英語能力はまだなかったと推定できる。

バードは京都滞在の後、念願の伊勢神宮にも行き、また神戸のギューリック夫妻の家に戻って3週間も滞在してから東京に戻っている。彼らの家がよく居心地がよかったのだろう。東北・北海道の旅とはまた違う苦勞もあったが、バードは全体としては満足して神戸から横浜行きの船に乗ったと思われる。

註

- 1) 金坂清則の推測による。（完4－273）
- 2) 完4－85
- 3) 新島邸は修復保存されて公開されている。当時使われた道具も展示して

- あり、そこに鉄製のワッフルメーカーがある。
- 4) この新築の家とその土地の購入は新島の友人 J.M. シアーズの個人的な寄付に負うもので、当時としては珍しくセントラル・ヒーティングの設備さえ備えていた。
 - 5) サトウはバード来訪の1年2か月後に野口の案内で京都御所の内部などを見学している。この時は西本願寺の赤松連城がサトウの宿泊先に訪ねてきた。
 - 6) 和田(2015)によれば、この日記原本の鍬ヶ崎の部分は何者かによって20行ほどカミソリで切り取られている。
 - 7) 『新島襄全集』vol.3 p.16 所収。この手紙についての真贋に関する事情は同書 p.741 に記されている。

参考文献

- 伊藤彌彦 1989 「新島襄の函館紀行」『キリスト教社会問題研究』37 同志社キリスト教社会問題研究会
- 伊藤彌彦 2002 『新島襄全集を読む』晃洋書房
- 太田雄三 2005 『新島襄 良心之全身ニ充滿シタル丈夫』ミネルヴァ書房
- 金坂清則 2005 「イザベラ・バード 埋もれていた史上屈指の女性旅行家と同志社との関わり」『同志社時報』119 同志社大学
- 楠木誠一郎 2012 『新島八重と新島襄 「幕末のジャンヌ・ダルク」と「平和の使徒」と呼ばれた夫婦』PHP 研究所
- 國米重行 2013 『幕末英国外交官アーネスト・サトウの秘書 野口富蔵伝』歴史春秋出版
- 小檜山ルイ 2013 「アメリカ的帝国の形成と女子高等教育の越境」『キリスト教社会問題研究』62 同志社キリスト教社会問題研究会
- 坂本清音他 2010～2014 「アメリカン・ボード宣教師文書：同志社女学校女性宣教師を中心として：スタークウェザー書簡訳および注」(1)～(9) 『アスフォデル』45～49 同志社女子大学英語英文学会
- 新島襄 [1946] 2004 『新島襄 [わが人生]』鏝田研一(底本編者)日本図書センター

- 新島襄全集編集委員会 1987～92『新島襄全集』3、5、8 同朋舎出版
同志社女子大学 HP 記念写真誌「同志社女子大学 125 年」
https://www.dwc.doshisha.ac.jp/about/publicity/publication/125_years/chapter1_2 (21.07.10 閲覧)
- 同志社大学同志社社史資料センター 2009「新島八重の生涯 進取と矜持」
第 36 回 Neesima Room 企画展
- 同志社 2014『新島襄自伝 手紙・紀行文・日記』岩波書店
- 中村健之介 2007「解説『宣教師ニコライの全日記』『宣教師ニコライの全日記』vol.1 ニコライ 教文館
- 中村健之介 2013『ニコライ—価値があるのは、他を憐れむ心だけだ—』
ミネルヴァ書房
- ニコライ [1879] 1993『明治の日本ハリストス正教会—ニコライの報告書』
中村健之介訳編 教文館
- 中村健之介監修 2007『宣教師ニコライの全日記』vol. 2 教文館
- バード、イザベラ 2012～2013『完訳 日本奥地紀行』vol. 1～4
金坂清則訳注 平凡社
- 吉海直人 「吉海直人の八重講座」新島八重顕彰会 HP
<https://yaenk.sakura.ne.jp/archives/yaekouza/1995> (2021.4.17 閲覧)
- 和田洋一 2015『新島 襄』岩波書店